

## 大学院生活の思い出

西水 良太（平成23年修了）

修士課程で農業経営学研究室にお世話になりました西水良太と申します。修了後は故郷の大分県庁に入庁しました。生産技術と経営改善の助言を生産者に直接行い、経営の自立と農業振興を図る普及指導業務に携わっています。学生時代からの念願の仕事を行えることに喜びを感じています。

思い起こせば学部生時代、私は関西の大学で経済学を学んでいました。低迷する農業に貢献したい、自分自身で農業経営体を育成したい気持ちが勉強を通して生まれ、農業普及指導員という職があることを知ります。職に就く前に、より専門的に農業を学びたい、この業界への適性を見極めたいがため、農業経営学研究室を受験しました。門外漢ながらも南石先生始め農業資源経済学部門の先生方に受け入れて頂き、濃い二年間がスタートしました。

まず関わらせて頂いたのが、暗黙知である匠の技を可視化する作業自動記録装置の実験です。作業者の視線をカメラ付きのヘルメットで、動線を背中に装着したGPSで、何に触れたかを指に着けたICタグで記録し、篤農家の技術をデータ解析して明らかにします。体のあちこちにゴテゴテと機器を装着した姿は強烈なインパクトで、農業経営学とは何ぞやと戸惑ったことを覚えています。しかしながら後日のことです。システムの動作確認のため研究室の先輩と機器を装着し畑を耕しました。私たちの作業の動きが鮮明に記録され興奮したこと、「暗黙知の可視化」に合点がいったことをはっきり覚えています。

後日のゼミで、「現状分析に留まらない。問題の原因特定で終わらない。問題解決のため、具体的手段まで論じるのが我が農業経営学研究室の特色」と先生が仰っていました。私はこの言葉が好きで、「経営スピリット」と親しみを込めて呼んでいます。

農業問題の解決に向けて、自分なりに「経営スピリット」を持って挑んだのが修士論文です。大学院での学習で大分の農業普及指導員になりたいという意思が固まり、地元で貢献できる題材を探していました。そこで取り組んだのが大分県を調査地とした「農業参入企業の課題と支援の方向性」です。この論文は何が問題かがわかった所まで、まさしく現状分析で終わっています。しかしながら、問題の把

握は修士論文で、解決に向けた具体的取組は就職後行うというのがミソで、企業の望む支援の方向性を理解した上で日々の業務を行えているように思います。先生が仰った「問題解決のため、具体的手段まで論じる」べしという教えは修士論文では達成できなかったため、今も修士論文は継続中なのかもしれません。実際に参入企業を指導して、農家とは全く違う視点で注文がつくため難しさもありますが、大分に留まらず日本を代表する企業を育成出来るよう日々精進しています。

勉強も遊びも濃密な二年間で、ここで出会えた方々とは今後もいいお付き合いが出来るように思います。一生モノの学びと出会いに心から感謝しています。



現在の職場にて



在学時、卒業された先輩方と